

北海道開拓の村 冬の生活体験

冬の防寒服

《角まき・マント》



(写真 左・中央:カクマキ 右:マント)

角まきは、女性用の防寒外出着で、四角い1枚布を三角に折り頭からかぶるように着用します。北海道では角まきと呼ぶが、東北や北陸地方ではワシガッパ、マワシトビ、フランケ、ケツなどと呼ばれた。

角まきは、国内の毛織物工業が発展する明治後期頃から、昭和30年代まで使われた。材質は厚手の毛織物で、一辺が約2mの方形で、初期には名前のとおり角形のものが多かったが、次第に布地の角が丸みを帯びるようになった。

「角まき一枚米三俵」といわれるほど高価な製品で、嫁入り道具の一つとして呉服店などから購入し、長い間大切に使われてきた。

※開拓の村で着用体験できる角まきは、道民の皆さんからの寄贈を受けたものです。

マントは、男性用の雨や寒さを防ぐために着る外套(がいとう)である。マントのほかに、二重まわし(マント)というマントもあるが、この構造は、膝丈の袖なしの部分を中心にマントが付き、ボタン付けの頭巾と衿に毛皮が取り付けられるようになっている。つまり上体の構成が二重になっているのが特徴である。また二重まわしは、明治の中頃に東京で考案され、北海道で普及し始めるのは明治後期からであり、高価なものであったため利用者は限られ、マントのように普段の外套着というよりも、正月の年始まわりや婚礼などのハレの日に多く着用した。

《テッカエシ》



テッカエシとは、防寒用手袋のことをいい、ニシン漁場では、網起こしや雪割りなどの作業に多く使われた。テッカエシは、はぎれを何枚も重ね、木綿糸で丹念に刺したり、布と布の間に綿を入れたりして作り、寒さを防ぐために親指と他の4本の指を入れるふたつの部分に分かれる、いわゆる「ぼっこ型」のものが北海道には多く見られた。また、手のひらの部分には別の布をあて、糸で刺して丈夫にした。これは子ども達にはとても便利で、本来の防寒用に使うだけでなく、キャッチボールやボクシングなどのグローブにもなった。

西洋式の本格的な手袋は、役人や軍人、あるいは都市部の一部の人々に限られたかたちで使われていた。軍隊で採用された軍手は、その後作業用として一般的に使われるようになり、さらに、大正期頃から都市部を中心に毛

糸の手編み手袋が普及し始めると、徐々にテッカエシは姿を消すようになった。

参考資料：○北海道の民具（北海道開拓記念館・監修、大久保一良・画、北海道新聞社）

○わら細工と冬の衣装（2005 北海道開拓の村道庁ロビー展）

○北海道開拓記念館第20回特別展・雪と氷と人間(目録)、第46回特別展・雪と寒さと文化(目録)

冬の生活体験③【製作：北海道歴史文化財団 2016.12】